多様な視座から　　vol １０

✍️「違い」と「間違い」の違いを知る

同じ景色を見ていても、そこに映る色は人それぞれだ。
澄み渡る青空を「晴れやか」と感じる人もいれば、光の強さに「まぶしすぎる」と目を細める人もいる。
同じ空の下にいながら、心に映る風景は微妙に異なる。
それこそが「違い」というものだ。

けれども時に、私たちはその「違い」を「間違い」と取り違えてしまう。
自分と異なる考えに出会うと、心の奥に小さな波紋が広がる。
否定したいわけではなく、「自分が揺らぐ」ことへの不安が、思わず防御の姿勢を取らせるのだろう。
異なる意見を前にしたとき、人は本能的に身を守ろうとする。

チームの中でも同じことが起こる。
練習方針、声のかけ方、試合のリズム……どれも一つの正解に収まるものではない。
しかし「統一」が重んじられる世界では、違う意見が時に息苦しさを生む。
それでも、異なる経験や感性が交わるからこそ、思考は広がり、学びが芽吹く。
同じ意見ばかりが並ぶ場所には、安心はあっても、新しい成長はなかなか育ちにくい。

風が吹かない場所では、帆は張れない。
違いこそが、チームを前へと進める風になる。

その風は時に強すぎて船を揺らすかもしれないが、揺れを経験した船は、やがて大海を渡る力を得る。
「間違い」は正すべきものだが、「違い」は生かすべきもの。
その二つを見分ける目を養いたい。
違いを認めることは、甘さではなく、互いの誠実さを信じる行為にほかならない。
耳を澄まし、相手の声を受け止められるチームには、静かな強さが宿る。
違いを抱えながら共に歩む姿こそ、人の成熟の証であり、未来へと続く確かな歩みなのだろう。

「余録」

沈黙の同調を超えて――「違い」は風、「誠実さ」は帆

現場で「違い」をどう扱うかは、チームの文化を大きく左右します。
スポーツの指導現場では、「統一」「一枚岩」という言葉がしばしば美徳として語られます。
もちろん、それは組織をまとめる上で欠かせない要素です。
ただし、統一が「沈黙の同調」と結びついたとき、そこに成長の停滞が生まれます。

誠実さとは「自分の考えを持ち、それを尊重し合う関係を築くこと」です。
違いを恐れず、違う意見を伝える勇気もまた、誠実さの一形態といえます。
それを受け止める側の姿勢……つまり指導者の聞く力、余白をもった対話の姿勢が問われます。
実際の現場では、意見がぶつかる場面を避けようとするケースが少なくありません。
「波風を立てない方がいい」「チームの和を乱す」という意識が働くからです。
しかし、建設的な意見の違いを扱えるチームこそが、真に強いチームです。
違いを受け入れる土壌があるからこそ、選手は安心して挑戦し、失敗から学ぶことができます。

教育心理学の観点から言えば、健全な集団は「多様性と安全性のバランス」によって保たれます。
意見の違いを「攻撃」ではなく「気づきの種」として扱える環境は、内発的動機づけを高めます。
選手は、自分の声が尊重されると感じることで、主体的な思考を育みます。
指導者にとって大切なのは、「違い」を認めながらも、「間違い」を正す軸を失わないことです。
ルールや倫理、チームの理念といった「揺るがせない基盤」の上に、多様な意見を乗せる。
このバランスを意識できる組織が、真に学び続けるチームといえます。

違いを排除するのではなく、違いをもって磨き合う。

その関係性の中に、誠実さが息づきます。

――「間違い」―と―「違い」――
私たちは時に、「違い」を「間違い」にすり替えていないだろうか。
自省を含めて、その違いを見分けられる目を育てていきたいと思います。